

部

歌

古林先生作詞

一 まや六甲に抱かれて  
ここ六甲台の水清し  
ちぬの浦和をみおろして  
シブキをあげる健男児

二 フリー プレスト バタフライ  
バック リレー ボロまでも  
凌泳健児の意気高し  
いざや競わん腕を撫し

三 ああなつかしの水泳部  
六甲台のプール辺に  
月見の宴で泳ぎやめ  
くる夏まっていきりたつ

# 水 泳 部 歌

作詞 古 林 喜 楽

作曲 山 田 貴 彦



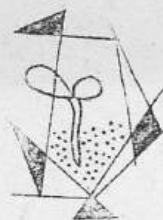
1. ま や 六 一 甲 一 に だ か れ て こ こ む こ が お か の  
 2. フ リ ブ レ ス ト バ タ フ ラ イ バ ッ ク リ レ ー  
 3. あ あ な つ か し の す い え い ぶ り こ だ い の



み ず き よ し ち め の う ら わ を み お ろ し て し ぶ し ぶ き あ  
 ぼ ろ ま で も り よ う え い けん じ の い き た か し い ざ い ざ や き そ  
 ブ ー ル べ た つ き み の え ん で お よ ぎ や め く る な く る な ま



げ る け ん だ ん じ  
 わ ん う で を 一 ぶ し  
 一 て い き い り た つ



## ふたたび温水プール論を

渡泳会会長 古 林 喜 楽

泳ぐためには水はつめたい方がよいから、私は温水プールといわないで、温室プールといっている。温泉プールに至っては、もってのほかなのであるが、折角のわたしの趣旨も、ときどきミスプリントされて、あっちになったり、こっちになったり、迷惑をしている。私の言いたいことは、一年中三百六十五日間、毎日泳げるようにしなければ、水泳王国の夢よ！ もう一度、というよりはなことは不可能だというのである。冬の間休業というような呑気なことでは、問題にならないというのである。

雪がちらつこうが、霰がふろろうが、それをよそにゆらゆらと泳げる体制を、一日も早くとのえなければならぬ。逆効果の強化訓練に厩大な予算を浪費するというような泥縄方式をやめさせれば、いくつも温室プールがつくられるのである。私はオリンピック大会の直後に、金井知事に私の悲願を書きおこった。ようよう王子公園に一つ造る予算が計上されることになったが、私は神戸市内に、少なくとも五つは温室プールをつくれといっている。忠勇の若林社長にもすすめているし、内外ゴムの奏野社長にもす

すすめている。つくれそうなる人には会う人ごとに口説いている。市長にもその内に折をみて、私の悲願をひれきする積りである。

私をして言わしむれば、水連って一体何をやっているのだと言いたいのである。東京には三十ぐらいつくりなさい。日本の市という市には、少くとも一つはつくりなさい。そして津々浦々、三百六十五日ぶつ通しの国民皆泳にするのである。ゴルフみたいなものはやめた方がよい。ゴルフが身体によいのは、歩くことと、日にあたることと、新鮮な空気を吸うことだけであって、あんな身体を一方だけにひねってばかりしていると、背骨がまがってしまつて、却って健康に悪いのではないか。ゴルフでもやらなければ、およそ運動なんかできない連中だけに意味があるぐらいのことである。

そこへ行くと、水泳はバランスのとれた全身運動であるし、頭をどうしても水上につき出すことになるから、姿勢がよくなり背骨がまっすぐになる。費用もかからない。こんな結構づくめの健康法はないのである。今日本では一日一万歩あるく万歩運動というのが、はやりかけているらしいが、それもよからう。しかし私はそれとともに、万歩運動もおこしてみたい。毎日一万米泳ぐ運動である。子供も親もみんな連れもて泳ぐのである。

この私の夢が実現したら、メキシコには間にあわないかも知れないけれども、その次ぐらいには、表彰式をみるにたえないで、こそこそ逃げかえった昨年のわびしい思いの、つくないができる

のではないかと思う。そうしたら私もその余慶をこうむって、寿命も多少はのび、はるばる東京へ馳せ参じ建物だけに驚嘆して帰った昨年のうらみを、いささかはかき消すこともできるのではないかと思つてゐる。

カッパ連中に人なきや！

## 先輩と上級生

水泳部副部長 田 口 寛 治

去年の正月、水泳部の四年生の諸君が私の家に遊びにきてくれた。いろいろ談笑してゐるうちに「下級生のころは、先輩はもとよりだが上級生もこわかった」という話に花が咲いた。上級生から「ちょっとこい」といわれると、カカトから頭まで電気のようなものがビリビリと走つたという部員もいた。どなられても、反感をもつ余裕などどうしていなくて、どうにも抵抗できない威圧感を感じるだけだったというものもいた。たしかに私の昔の運動部生活でも同じだったと思う。先輩の姿がブルサイドに見える日などは、私たち下級生はチリチリしていた。部室のかけで、仲間が先輩の制裁を受けているときには、おびえ上つた。そのおびえた心と、カッと照りつける真夏の太陽がブルの水にゆれる

世界との違和感のようなものを今だにはつきり思い出すことができる。

「先輩がこわかった」という話はやがて「今の二年生以下は上級生に対してノホホンとしている」「自分たちの下級生のころとだいぶんちがう」「どなりつけたら、そんなら退部しまつさ、とかんたんというような気がする」という話に移つていった。

今年の正月も、水泳部の四年生諸君が遊びにきてくれた。いろいろ談笑してゐるうちに、また「下級生のころは、先輩はもとより上級生がこわかった」という話に花が咲いた。そしてやがて「それにくらべて二年生以下は自分たちのころとちがう」「とくに今年の一年生は変わつてゐる。今までの調子でやるとカンが狂う」という。

こういふふうな「自分たちのころはつらかったが、今の下級生は……」という嘆きは、程度の差こそあれ、おそらく毎年くり返えされてきたのだと思う。私自身、上級生になつたとき、同じ感じをもつた。また軍隊の内務班では夜毎きかされたものである。

だが、今年の四年生がとくに「一年生は変わつてゐる」といつてゐるのは気になる。というのは、われわれ教師の間でも、いまの一年生はこれまでの新入生と「少しちがうのではなからうか」といふ話がよくでるからだ。「どこがちがうのか」といわれても、ズバリ「ここだ」といふふうにはいえないが、何かまた「新しい世代」ができつつあるのではないかという気がする。彼らの多く

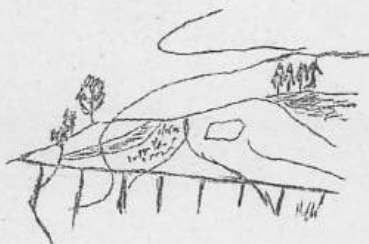
は生まれも戦後の、文字通り戦後っ子である。また、いわゆる入試地獄をくぐりぬけてきた連中である。これまでの学生とのちがいはそんなところからでてくるのかもしれない。原因はとにかくとして、表面的に気づく点では、よくいえば「人なつっこい」「悪くいえば「なれなれしい」ようだ。先日、私は学校前でバスを待っていた。すると「センセイ」と呼ばれ、ボンと肩をたたかれた。ふりむくと一年の女子学生である。しかも別に用があつて呼んだわけでもなかつたようだ。二十年近く教師をしているが、学生からボンと肩をたたかれたのははじめてである。その女子学生のくったくのな顔を見てみると、いまに子ども同士がいたずらでやるように、「センセイ」と呼ばれ、返事をしたら「ボカン」といわれたり、ふりむいたらホッペタを指でつかれたりするのではないかという恐怖を感じた。

先日、旅行中の汽車で、東京のある私大の野球部の学生と乗り合わせた。彼はその野球部の上級生の「封建性」を嘆き、クレーターをおこすのだ」といっていた。労働組合の第二組合のように、第二野球部ができているところもあるそうだ。

戦後、家庭で、職場で、従来の人間関係が大きく変わった。だが大学の運動部内の人間関係は、わりに以前のままを保ってきたようである。しかし運動部にもことによつたら新しい波がおしよせてきたのかもしれない。

私は来年の正月、さらに二年、三年後の正月に、四年生が遊び

にきて、「何を、どう、いうようになるか」、楽しみにしている。



# 「凌泳会」役員紹介

本会の本部及び地方支部の役員が次の通り決定しておりますので紹介します。

姫路	大阪	京都	関西支部	九州支部	四国支部	中国支部	名古屋支部	関東支部	会計幹事	幹事	幹事	副会長	会長
野田浩志	武政英幸	西岡良宏	柳本正雄	印堂勝美	中村市治	古川富美男	鈴木啓介	永野一彦	小山賢之助	山田常雄	石井義章	岡本忠男	小林喜楽
								浜川広海	森芳夫	宇賀史郎	岡田昌三		
			佐藤一夫										

# おわびとおねがい

幹事長 学12 岡本忠男

昨年は旧三高大戦が東京で開催されたので応援に行きましたが、東京の漫泳会会員の方々と懇談ができて愉快な一日をすごしました。その夜、副会長の小山賢之助さん、森芳夫さんに御馳走になりました。厚く御礼申し上げます。

おわび 漫泳会の幹事長を引受けて、はや一年、石井義章、岡田昌三の両幹事の協力と東京漫泳会の方々の後援により、やっとな漫泳会会則と組織づくりを終ったところで、三十九年度は過ぎてしまいました。仕事らしい仕事もせず誠に申し訳ないことと思っています。昨年の秋に漫泳会の卒業生・現役の役員と会合して四十年年度の計画について相談する予定でしたが、父が八月下旬に急死したため、雑用に追われてそのまゝになってしまいました。又本年度の「漫泳」の御寄稿をお願いすることについては、いろいろと腹案もあつたのですが、水泳部部員より一月末日締切で水泳部生活の思い出と近況報告を主題にして通知を出したあとでした。寒気未だ退かず、春暖の候とならざる時にこの通知を出すことはカップの諸兄には書く気分がのらなかつたと思います。来年度は主題と時期を考慮して御寄稿をお願いするつもりです。

おねがい 本年度は漫泳会のアルバム作成を計画してまいります。左記の要領にて水泳部までお送り下さいませ。

## 記

- 一、本人又は家族写真（大きさは自由、但し、いずれの場合でも家族の御氏名を記入して下さい）
- 二、水泳部生活に思い出となつた写真、又は卒業後にも記念となつた写真

尚、写真は複写後返送させていただきます。

以上



# 先輩からの便り

憶 出

高 18 溝 口 卓 郎

吾々の在学当時は夏季休暇中に水泳同好者が海浜合宿する慣しがあった。その第一回は但馬の竹野、第二回は紀州の田辺、第三回は伊勢の二見浦、第四回が丹後の橋立であった。リクリエーションが目的であったので競泳の練習には余り役立たなかったが、校友会から部費を取る主名目が海浜合宿であった為らしい。そんな中から少しは泳げそうな者が部員にと引張られたもので、小生の入部も第二回大阪高商戦に泳者不足で狩り出されたのが始まりである。

その頃の部員総数は大抵七、八名止りで、一人が六種目位に出ないと対校戦が出来なかつた様な貧弱さだったが、それでも面白い事に関学に試合を申込んだら逃げられた事もあったし、又特筆すべきは大正十一年七月、房州戸田海岸で行なわれた東大主催全国水泳大会で野田先輩が五十米で日本新記録された事だ。素質、体軀から言つてブルで練習出来たら此方はもっともって記録を

縮め有名選手になられた事と思われる。

そんな訳でブルが欲しい欲しいと言ひ暮らしながら青谷の池へ通つたものである。尤も池辺に住むマドンナの引力が強かつた故もあるだろうが、ターン練習用の板を張りつけたスタート台を造り五〇米の見透し線に綱を張つて練習に励んだものだ。

待望のブルも在学中には遂にお目に掛れず、卒業の年の夏に歴代部長の御尽力や近所からの寄附金で武道々場南側の空地に防火用貯水池名目で五コース二五米のものがやつと竣工、全国中等学校競泳大会を主催した時、晴れのスターターとしてピストルを握らせて貰つた感激は今も色褪せない。学校の六甲台移転でこのブルは短い歴史しか持たないが、高商末期から大学初期の俊鋭が果立つた記念すべき初のブルであった。

## 一生懸命探した名前

学 4 桑 川 義 男

(昭和十年)

編集係から「クラブ生活で最も感激したこと」を書くように頼まれてから、あれこれと記憶の糸をたぐつてみたが、なにしろ三十年も前のこととなると、その記憶そのものからしてさだかではない。なんだかだと思ひ出してはくるのだが、さて一番感激した

ことばとなるともうひとつピンとこない。それもなんの誰がしとでもいうような選手だったらしらぬこと、たゞ員数を揃えるだけのための選手だったのだからなおさらのことである。

もともと水泳部にはいったのだからそれほどの覚悟や野心があつてはいつたわけではない。入学した時の春も終りの頃、高商時代から親しくしていた山本四次君（現在朝日新聞社役員待遇、経理担当）が剣道部にはいつて稽古しているのを見にいつて、そのついでに道場の横にあるプールで泳がしてもらったのがきっかけで、熊野さん（昭和八年）だったか鍵本さん（昭和八年、戦死）だったかに声をかけられて、ただなんとなくふらふらと水泳部にはいつてしまったのである。

当時の水泳部員は右の両先輩を含めて六、七人といつた状態だったのだから少しでも泳げる人間なら欲しかつたのであろう。そんなことではいるなりさつそく練習をさせられ、一ヶ月もしないうちに神戸高等商船学校との定期戦に出場させられてしまった。僕の種目は二百平泳、幸いに高等商船の連中が僕よりもさらに遅かつたのでまあ緒戦はどうやらビリにならずに済んだが、それ以後の大阪商大戦、神戸学生、関西学生、対東京商大戦はいずれもいけません。いつも他校の選手の後塵をはいしてどうぞこうぞゴールインするといふ始末であつた。たゞそいつた時に、これは一年の時だつたか二年の時だつたか記憶がはつきりしないのだが、確か神戸市民プールでの対大阪商大戦の時だつたと思う。当方の

選手が足りないで、先にあげた山本 次君、それにラグビー部の小松哲雄君（現在岩手県立高田高等学校教頭）と僕の三人で二百平泳を泳いだ。一、二、三着は先方でこちらは残念ながら四、五、六着、その順は僕、山本、小松の順だつたと思う。

ところがどうしたことか、その翌日の神戸新聞に、この対大阪商大戦の戦績が出ていて、しかも各種目とも六位（つまりビリ）までのつてゐる。当然四着の僕の名前もつてゐたわけだ。新聞に名前がのつたのは生れてからもちろんこれが始めてである。しかも悪いことではなく、四着といえども堂々（？）戦績の結果によるものであつたから大いにテレなながらもこれは愉快であつた。その晩小松君と上筒井の「たぬき」で自祝の宴を張つたように記憶してゐる。

そのほか切れぎれの思い出はあるが、強いて「最も感激した」といふことになればこれくらいのものであろう。しかしクラブ生活の思い出はいつになつても楽しく懐しいものである。近年同期の池谷俊一君（ライオン不動産会社取締役大阪支店長）と時々会う機会に恵まれているが、遅くとも、早くともとに角共に泳いだ仲間には他の級友と違って一段と懐かしいものがある。

## 水泳部生活で一番感激したこと

新5 岡田昌三

私は性来余り物事に大げさには感激出来ない性質らしい。自分の気が小さい事を人に知られないよう冷静を装っていた子供の頃の習慣が身についたのだと自己分析している。従って感激した事の記憶に乏しいので誠に申訳けない。今後極力さゝいな事にでも感激するようにしようと考えている。取敢えず定められたテーマなので致し方がない。非常に嬉しかった程度にして頂くことにした。

× ×  
私はいつの頃からか、どんな勝負事でも好きになった。その経験も人後に落ちないと自負している。さあ勝負！と言う時の全神経緊張した気分は文章では表現し得ない充実感が湧いてくるのである。この自分の性格の為に後輩諸君多数に甚大な損害を与えてきたように申訳けないと常々反省している。本当です。

水泳部生活三年目、シーズン最後の関西インカレナイターの大坂プールは本当に美しかった。愈々五〇米フリー決勝種目のアナウンスがされた。さあ勝負！と言う時がやって来た。

自分にとってはこのチャンスしかも二度とない、宿敵大阪市

大の永田氏は隣りのコースでウォーミングアップも済ませ、しずくをたらしながら笑いかけてきた。彼は四年生で自分は三年生、過去三年間この五〇米の種目で予戦・決勝と何度一緒に泳いだ事だらう。だが決勝で彼に勝った事は一度もない。彼の方では私をライバルとして意識していたらうか。

この日予選通過記録は彼と同タイム29秒8。笑いかけてきた彼は、私が緊張してこわい顔をしていたせいか、真剣な顔付きになつて「どや？」

「永田さん、これが愈々最後の勝負になりましたなあー」

「そやなあ」

それきりでお互いに黙ってしまった。

この種目の目標はトップになる事？ 記録短縮？ いやそんな

事はどうでもよかった。何がなんでも彼に勝つんだ。

ウォーミングアップさえ意識してしなかつた。そんなエネルギーも惜しかった。

ビー 笛が鳴った。静寂・孤独・カミソリの刃・無心。

「さあ勝負だ！」

自分にとってこの瞬間が最も嬉しかったのであって、勝った事が嬉しかったのではなかつた。

# 信州の生活

新9 野田浩志

課長から信州松本へ長期出張を命ぜられたのが一月七日、体内には元旦以来のアルコールが未だ充滿しているところであった。

「スキーが堪能出来るぞ！」と一瞬思ったけれども、生れて初めての雪国生活に、温帯性の私には、その寒さを想像するだけで鳥肌の立つ思いがした。

果せなるかな、松本到着直後にひいた風邪は慢性化し、その熱き層は紫色に変じてカサカサになってしまった。けれども風邪で寝込むことのなかったのは、あの冷い六甲台のプールで震えながら泳ぎ通した鍛錬によるものであろうか。

一月十八日、私は松本の人となった。四方に雪を戴いた高峯が青色に輝いてそびえている景色はすばらしく、特に女性を感激させるに十分なものであった。

日本アルプス（北、南、中央）と美ヶ原高原に囲まれた盆地になる松本市は気温こそ低いが、レジャーブームの昨今、信州に滞在することになった私が、羨望的（特に女性の？）となったのも無理はない。最近のオフィス・レディーは遊ぶことが最先に浮かぶらしく。

スキー場は八方尾根を中心とする大糸沿線、赤倉、妙高、志賀高原の信越沿線の各駅に点在し、スケート場も白樺、蓼科、諏訪美鈴湖があり、いずれも日帰りコースで楽しめる。夏ともなれば夏山登山、春秋には高原の散策、女人筋には冬山というのもある。美ヶ原高原からは、日本の高峯が冬には雪化粧、夏には素肌が一望のもとに楽しめるからである。

信州の生活に欠かせないものに、コタツと漬物がある。来客は必らずコタツに通され、お茶と漬物があてがわれる。これが信州人の冬の生活なのだ。お茶は常に湯呑に一杯にされ、少しでも飲むと注がれる（丁度アルサロヤバーでのビールを想像して頂ければ良い）。漬物は主に野沢菜かタクアンで、妻揚子でついで喰う。スキーで民宿された方には思い当るふしがあるだろう。この漬物、夜には酒のツマミとして結構やれるものである。信州の「おみやげ」はヌカ味噌臭いが漬物をお奨めしたい。

松本市の中央に国宝松本城がある。別名鳥城といわれる黒い城で、一時武田信玄も支配したことがあるという。こゝには天守閣に一体となった月見櫓という他に例を見ない櫓がある。見るからに聞くからにこゝで一杯飲みたくなるようなところだが、実は、数年前に市の大名職員達が古の装束を身にまとい、女子職員を侍らせて宴を張り、一躍有名になったところだ。歴史的事実として説明書のなかったのが残念だった。

美人の好きな私は、信濃美人というものに秘かな期待を寄せて

松本へ来た。秋田美人、新潟美人に属する雪国タイプを想像していた。事務所よりは外にいることの多い私は、信濃美人なるものの類型をつかもうと努力したが無駄であった。どうも週刊紙のハシ乱は地域的美人をなくしてしまわらしい。土地の人に聞くと、「信濃美人なんて、おらんジイ、誰が言っただ」という回答。むしろ信州は美人の不毛の地といえるらしい。

私の滞在予定も終りに近ずいてきた。最近では或る程度、当地の方言をまじえて電話が出来るようになったが、期待していたスキーには、一度行ったきりだ。仕事の性格上、休暇をとってのんきに遊ぶことは出来ない。レジャーはあらためて遊びに来たときにすることにした。

なお小生、四月一日付で当社のオートバイの販売会社であるカワサキ自動車販売株式会社に意向することになりました。相変らぬ御支援御鞭撻の程お願い致します。本稿をもって御挨拶に代えさせて頂きます。

## 水泳プールの殺菌法と 珪を自動的に一定に保つ方法

新12 山 本 忠比古

学会統合にともない新プール建設の声も聞かれるので、最近の

プールの水の管理方法について紹介をしてみたいと思います。

水泳プールの水の殺菌剤は、非腐食性であり、プールの金属、石膏部分をおかさないうこと、取扱いが簡便であり、安価なことが必要である。

今日の一一般のプールはポンプによって水を循環させてフィルターに通し有機物無機物をとらえ、色のよごととバクテリアの繁殖を防ぐと同時に殺菌剤を添加して殺菌を行なっている。

殺菌剤には液体塩素、または現在ではこれが高価で、取扱いに危険であるので、銨物体に塩素イオンを混合した配合物を用いているが塩素イオンを安定に保存するためにアルカリを加える必要があり、苛性ソーダと消石灰を過剰に含んでいる。

したがってプールに入れた場合に強いアルカリ性となる。プールの水は、PH値を一定にしないと藻類が成育し、フィルターの濾過効率を妨げるのでアルカリを中和するために塩酸を加えてやらなければならぬ。これは操作に危険をともなうし、加えて過ぎてPHを七・四以下に下げてしまうと、循環濾過装置の金属部分やプールのしっくいを浸食させる恐れがある。

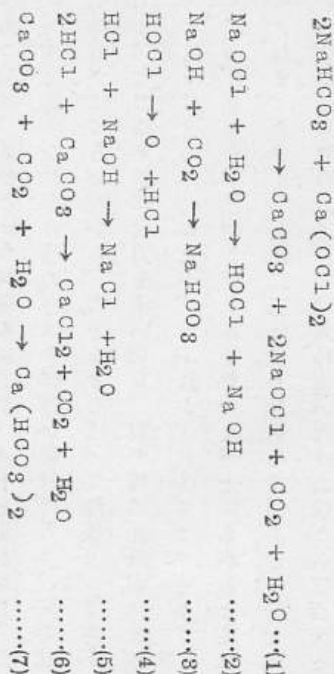
この欠点を改良するために、W・B・マレー氏の方法が紹介されているので以下にのべておく。(日本科学技術情報センター提供)

それは粉状または錠剤状の安全は殺菌剤で、同時にPHを七・四と七・八に自動的に保つことのできる調合品であり、組成は重炭

酸ナトリウム（重ソウ）一・一八、次亜鉛素酸カルシウム一の重量比のものを用ゐる。

これを循環ポンプの排出口と濾過器の入口の間のパイプ中に多孔質のバスケットに詰めて装填する。

殺菌とPHの調整は次の七つの段階的反應によつて行なわれる。



すなわち殺菌は(4)の発生機の酸素の作用で行なわれ、PHの調整は(1)により生成した炭酸カルシウム $\text{CaCO}_3$ が(6)の反應で全部消費されずに残り、(7)の重炭酸カルシウム $\text{Ca}(\text{HCO}_3)_2$ となるが、 $\text{CaCO}_3$ は不溶性のためほとんど未反應で微粒状で残つてゐる。

この $\text{CaCO}_3$ は、プールの水が酸性であればその酸に吸収され、またアルカリ性であれば飽和点に達するまでさらに水溶解して $\text{OH}^-$ を吸収し中和する、いわゆる緩衝作用を示し、水のPHを自動的に一定に保つつわけである。この方法は米國特許になつてゐる。

## 回 想

新 13 前 田 和 秀

僕の水泳部への入部の決定的な動機は、云うまでもなく自己の限界をためしたかったからである。そして現在その目的は自分で達せられたと思つてゐる。

一年生の時は無我夢中で泳いだ。合宿時には必ず肩が痛くなり、消燈後もずきずき痛んで寝られず、ねむれないまま翌日を迎える日がほとんどであった。その結果、昼間はねむくて食慾がなく、体重もどんどん減つた。しかし制限タイムは遠慮なく課せられた。幾度か水泳部をやめようかと思つたが、これも自己の限界をためすいい機会だと思つて頑張つた。又水泳部に対する誇りを持つていたので、雨の日も風の日も練習はさぼらなかつた。水球の練習も少なからずやったのを覚えている。ロングパスもはじめは他の人の半分しか飛ばなかつたし、ドリブルシュートも出来なかつた。ただ壁ボールとラウンドパスだけは大体出来たように思つてゐる。一年生の時は、泳ぐことに夢中で、苦しみの連続だった。井上さんがよく僕に云つた。「最初から飛ばさなきゃ速くなれない。最初の二五米、五〇米でもよい、速い奴について行け、それが結局八百米までついて行ける最良の途だ」と。又野田さんもよくコンパ

の席上で云われた。「飛びこむ時ラストと思え、帰ってきてラストの声がかからなきゃ、次に帰ってきた時にラストと思え」

自分も同感だと思いたい顔張ったが、シーズン・オフでジョン。そのシーズン・オフたるや、春の合宿がまち遠しかったこと。二年生の時はロングでも二百でも何でも初めから飛ばすことに全力をつくした。その結果、自分では競泳における絶好調。記録の上はベストでないとしても、一だったと思っている。白浜合宿の初日、ロングのスタートから百のベストをねらってダッシュしたものの、足をつってしまったのはショックだった。

二年生の時は、試合という試合には必ずベストを出したし、二百メートルで始めの百を自己のベストに近い記録で入り、次の五〇は他の者がばてる時だから、力をふりしぼって頑張る、ラストの五〇は、その時までには全力を使い切り、腕や脚に乳酸がたまり、息もすっぱく感ぜられていたが、やぶれかぶれてピッチをあげ、ゴールにたどりつく、というレースをやった。上にあがると足はガクガクして、スタート台に二三分すわり込んでいるのが常だった。その結果百米で自分より五、六秒速いだけの奴なら二百米ならほとんど勝ったものである。

競泳の他に水球に於てもその基礎力は二年生の時に養われたと云ってよい。つまり一年生の時からボロの試合はほとんど見たので、何も知らずにフォーメーションをするというわけではなかった。二年生の時は試合にはあまり出ななかったが、練習だけは人

倍やった。四、五月頃、家に帰って飯を食うまで、ふるえがとまらない程寒い目にあつた。そのためか三・四年の頃はだんだん寒さにもなれてきたものだ。今から思うと二年の時が一番充実していた様に思う。

三年の時、競泳はそろそろやる気はあまりしなくなり、ボロがむしようにやりたかつた。又練習試合に於ても、自分がやらなければ、という自信と気迫を持っていた。従ってボロのバックでは相当自信を持ってプレー出来た。残念だったのは、リーグ戦で立命に敗けた時。シーズン中にもう一戦交えたかつたがその機会なくシーズン・オフ。

さて四年生の時、いかにすれば部が強くなるかで頭をなやます。まず競泳では毎年京阪神から国公立までの記録ののびが停滞気味であった。その理由はピート練習の不足と考え、又すべてのスポーツは脚が中心だと考え、陸トレでは、かえる飛び、フルスクワット、ランニングを中心に行ない、シーズンはじめ、最盛期を問わずピート練習を相当行なった。又練習参加人員が少ない時は、表面では平静を装っていたが、内心ではカッカとして夜寝れない時しばしばあり。ボロに於てバックスがフォワードで大いに迷う。これもボロメンの量不足からであった。結果的にはフォワードで出た対一ツ橋戦の敗戦で明らかのように失敗であった。四年生よ！ まずバックスを固めよ、即ち上位三名をバックスに持って行き、それからフォワードをきめよ。

次に一・二・三年生よ。練習には絶対参加しろ。ミーティングに欠席した時の上級生の迷惑、他の部員に対する悪影響を考えた事があるか？ オレは一年生を少し甘やかしすぎた。結果は悪かった。一年生のためにも決して甘やかすな、きびしくせよ。それが一年生のためにもなるのだ。きびしい練習でやめていく奴はもと水泳部員ではない。語学が午後に集中している現在、語学は出てもよいという慣習は打ちやぶるべきだ。何よりも必要なのはまとまりである。水泳部員が全員同じ時刻に練習するという事である。一人の天才よりも、よくまとまった五人の方が強いと思う。豊田がぬけ弱体化が予想された西鉄が優勝したではないか。又、金田が抜けた国鉄の弱体化が予想されているけれども、自分は決してそうは思わない。もし金田が抜けた事で国鉄が一層団結されたならば、昨年よりもよい成績が上げられるであろう。水泳部を強くするのは、一に団結、二に団結である。水泳部はここ数年上昇の一途をたどっているが、この上昇を飛躍さすために、先輩の犯した誤ちを改め、良い点を吸収し、大いに先輩を利用すべきだと思う。

小生まだ勤務地がわかりませんが、もし大阪勤務となれば、ブールにしばしば出沒するつもりです。紙面を借りてお約束致します。卒業にあたり現在の心境「水泳に対するみれん等一かけらもない。あるのは水泳をやった事に対する満足感と誇りのみである」。

1 完 1



## 東京からの連絡 久保

関東支部では昨年三商大戦を前にして、支部総会を新宿のサントリバーで開催されました。以下東京在住の凌泳会会員の現況について二、三紹介させて頂きます。

白山氏（高15）と小山氏（学1）は昨年十月、日本水泳連盟四十周年記念式において、功労を表彰されました。

サントリーの中崎氏（学19）は、営業次長として、ビール販売の陣頭に立ち、大いにメートルをあげておられるとのことで、林氏（学11）はその下でライトバンを運転、ビール界にセンセーションを巻起しておられます。

山口宗樹氏（学10）は三菱銀行本店の副部長に栄転され、三菱銀行水泳部女子選手の面倒を見て居られます。尚三菱銀行水泳部は、東京実業団の強剛チームです。

次は東京ではありませんが、三井物産名古屋支店勤務の富中氏（学13）の御令閨は、閨秀作家の誉れ高く（文名は安西篤子）は今回、直木賞を受賞されました。

（編 集 係）

昨年、学部十三回卒業の荻野先輩よりお便り頂きましたが、締

切りの期日の関係で掲載することが出来ず、今回にと予定しておりましたが、係の私の手落ちで紛失してしまい、お詫び少々、官部と二人でお訪ねしました。

現在先輩は大阪の船場の近くで、衣料関係の富久屋商会という会社を経営しておられます。職域販売が主力なので不況の波もなるとかとのことでお忙しい店の様子です。

歸りに、凌泳への寄稿をお願いしてきましたが、会社へ帰られるから急に名古屋の方へ出張とのことで寄稿出来ずと連絡を頂きました。記憶を頼りに、荻野先輩の御話しをまとめさせて頂きましたが、間違っている点はお許し下さい。

御家族は現在、奥様と、高校のお嬢さん、それに今年から中学の息子さんの四人暮りで、西宮の仁川にお住いです。

話は自然、現役時代のことには及びましたが、当時は、全国的に有名な選手もいて、なかなかの活躍だったとのことでした。

平泳ぎの種目に、バタフライ泳法が考え出されて、学部十回の山口先輩など、馬力に物を言わせて、スタート直前とゴール寸前はバタフライで大いに飛ばされたこともあったそうです。

荻野先輩は七月の水泳シーズンが終ると、秋は野球の選手として関西六大学戦にも出場をさせて頂かれたとの事です。

野球部も部員不足で、マネージャーまで、試合に引張り出し、馴れぬ守備で、ゴロを足で蹴飛ばして、二塁打にしまった選手も居たというエピソードも聞かせて貰いました。

お忙しい折お訪ねしたにもかかわらず心快くお会い下さって、紙上を借りてお礼申し上げます。

（久保記）

## 凌泳会の部会計報告

39年度収支決算			40年度予算案		
収入	前年度繰越	1,000	収入	前年度繰越	1,870
	凌泳会費	145,500		凌泳会費	150,000
	寄付金	56,000		寄付金	60,000
	会合費	26,400		会合費	35,000
	計	228,900		計	246,870
支出	凌泳発行費	25,350	支出	凌泳発行費	25,000
	水泳部援助金	145,900		水泳部援助金	151,000
	会合費	425,08		会合費	40,000
	交通費	4,495		交通費	10,000
	通信費	7,700		通信費	10,000
	雑費	1,077		雑費	10,870
	次期繰越	1,870			
	計	228,900		計	246,870

## 水泳部の部会計報告

39年度社支決算			40年度予算案		
収入	前年度繰越	4,499	収入	前年度繰越	8,992
	凌泳会援助金	145,900		凌泳会援助金	151,000
	部費	9,700		部費	10,000
	合宿費	301,800		合宿費	320,000
	有友会援助金	39,740		有友会援助金	40,000
	会合費	52,880		会合費	54,000
	ユニホーム代	20,000		ユニホーム代	25,000
	雑収入	16,572		雑収入	20,000
	計	591,091		計	628,992
支出	水連加盟費	6,500	支出	水連加盟費	6,500
	試合費	50,028		試合費	40,000
	合宿費	334,237		合宿費	390,000
	会合費	65,660		会合費	60,000
	設備費	33,190		設備費	40,000
	交通費	8,086		交通費	10,000
	通信費	11,170		通信費	12,000
	燃料費	3,700		燃料費	8,000
	医療費	6,690		医療費	10,000
	消耗品費	8,497		消耗品費	9,000
	印刷費	1,024		印刷費	1,000
	ユニホーム代	41,600		ユニホーム代	26,000
	記念品費	5,900		記念品費	6,000
	雑費	5,821		雑費	10,492
	次期繰越	8,992			
	計	591,091		計	628,992

## 部のこと

B 14 主将 樋口 周 平

六甲台ブルーの水は青々と冷たく、春の訪れもまだ感じられな  
い昨日、今日であります。四月の訪れとともに長かったシーズ  
ン・オフも終り、いよいよ待望の水泳シーズンの開幕となりまし  
た。我が水泳部も四月中旬の山代温泉合宿を皮切りに張切ってシ  
ーズンに突入しようとしています。

さて、競泳、ポロの今年目標と現状について一言述べてみま  
す。

競泳についてみますと、従来あまりにも三商大戦に重点がおか  
れ、三商大戦に勝てば他の試合の成績は二の次とされる傾向があ  
りました。現在転換期にある水泳部にとってこれでは小さくまと  
まってしまふ恐れがあり、部の発展のためには全国大会に結びつ  
く関西国公立・関西インカレに重点をおくべきだと考えています。  
そこで今年はずせの第一段階として関西国公立に重点をおき、  
二位以内に入賞したいと思っております。

またポロについてもみますと、やはり立命館大を敗って関西一に  
なることであります。

次に現状について述べます。

まず競泳では、フリーのロング陣には手嶋(4)、樋口(4)、山内(2)  
等、ショート陣には宮部(3)、片平(2)等がいてかなり充実はしてき  
ました。例年の如くエース的存在がなく不安であります。また  
関西国公立のレベルも上り、八百米で十一分、百米で一分五秒を  
切ることを要求され一層の奮起がのぞまれます。

バタフライでは日野(4)、中畑(4)、阿部(3)があり、昨年は阿部が  
かなり良い記録を残していますので今年も期待できましよう。日  
野、中畑はまだ力不足の感があり、成長が望まれる所です。

ブレストには阿部と後藤(2)、大崎(2)等がいますが、後藤、大崎  
は練習が足りずスタミナ不足が懸念されます。スタミナがつけば  
大崎などには好記録が期待できます。

バックには木下(4)、由佐(3)、山内(2)がいますが、それぞれスピ  
ード、スタミナに問題があり、国公立インカレでの入賞はまだま  
だといった感があり、各人の奮起が望まれます。

次にポロについてみますと、昨年のレギュラーとしての日野(4)  
樋口(4)、阿部(3)、宮部(3)、経験者の木下(4)、中畑(4)、久保(3)を中  
心として手嶋(4)、由良(3)、片平(2)、山内(2)などがいます。しかし  
レギュラーにしても経験者にしても、いずれもどんぐりの背くら  
べであり飛抜けた者がいず、オーダーも定まらない有様です。さ  
らにキーパーの経験者が一人もいなく、誰をキーパーにするかが  
大きな問題となっています。また現役の中には適切な指導をうけ  
た者がいず、我流の練習となりがちであり、コーチの必要性を痛

切に感じているしだいでありませう。

結局、現在の状態では目標の達成は未だしの感がありますが、練習を重ねて一歩でも目標に近づきたいと思っています。

なお練習は一時半より六甲台プールで行なっております。五月からは日曜日も行ないますので、先達諸兄の御来台、御指導をお願い致します。

## 河童のあゆみ

### 春 季 合 宿

大聖寺で田舎電車に乗り替えて約二十分位（と記憶しているが）雨上りの夕霧が流れている山代駅に我々が降り立ったのは四月八日であつた。いよいよ三十九年度のシーズン・イン。今年も頑張るべく春季合宿に入る。

もう大方一年位も前の事なので記憶も大分薄らいで確かでは無いが、思い出すまゝに書いてみたいと思う。

何せ温泉プールなんでものは初めてなので他と比較出来ないが、別に泳ぎにくいとは感じなかつた。それにその観光センターのあ

ちこちらに有名な水泳選手の写真が貼つてあつたところから察すると、なかなか立派なものだつたと思う。特筆すべきは、食事の献立の立派だつた事である。品数もあり、質もかなりだし、これは皆の一致した意見でもあつた。それに適當な娯楽設備もあり（機械の故障から、十円入れなくても玉が出てくる遊び台があつて、これで皆良い子をして遊んでいたようだ）良い所であつたと思う。難を言えば、これとて水泳には関係ないのだが、天候が悪かつた事位ではなかるるか。毎日、明けても暮れても雨か曇天の日であつたように思う。なかには温泉地というところから少々期待はずれの方があつたかもしれぬが、それでもチャッカリテートをしていた方もあつたようである。

話が本題からずれているようにこの辺で、合宿の成果というものを振り省てみると、別にこれといつた事も無かつた様子である。春季合宿から成果を期待するのは無理な話で、その年の目安となる程度で、その時の日誌を見ると、フリー陣の出足の悪さがしやつたけれども結構楽しい合宿を送れたと思う。

帰る頃には桜も奇麗に咲き、特に車窓から見える菜の花畑は今まで目に浮ぶ。もう一度あの春の陽の降る菜の花畑を訪うてみたいと思つた次第である。

## 大学祭のころ

(水球トーナメント)

大学祭を中に挟んで、五月十二日より、強化練習に入った。目指すは、二十四日の水球トーナメント、打倒立命である。

冷い水の中で一週間過ごし、十七日は、大学祭の華、園遊会である。

水泳部の売物は伝統の香り漂うカップ焼き。ポリバケツを取り囲んで、中のドロドロした臟腑をつかみ出し、串に刺すカップ連中の有様は、とてもじゃないが、お客様には見せられない。その異様な姿は、見ていてコックイを通り越して哀れである。

夕方、日も暮れて、内輪だけになると、もうヤケのヤンパチ、酒をおあって大いに暴れ回る人もいた。誰でしよう。

次回は、製造方法を合理化して、もっと簡便にしないとたまらない。

園遊会では、カップ焼きをどうぞ!! 美と健康の増進に役立ちます。

(久保記)

南海電車で府大についたのは正午前であつたらうか。たれこめた曇り空が今にも降り出しそうな天気であつた。新年度初の対外試合である。「不安と期待」あの陳腐な言葉がびつたりする試合前の雰囲気は、一瞬にして勇ましいファイターを作り上げてし

まう。新年度だと、しみじみ感じるのは、去年までいた先輩のいない何となく若々しい新しいチームと数年来味わつて来た、この試合前の雰囲気である。第一試合は予定より一時間ばかりおくれで、神大と京大の試合が始まった。降ったりやんだりの小雨の中で熱戦、まさに熱戦。京大は強かった。先取点を取られてあせつた。京大の若手フォワードのダッシュはすごかった。泳力にもを言わせた試合運びは神大をとまどわせた。2-13、神大の辛勝であつた。市大が棄権した為、三十分の休憩の後立命との試合。打倒立命をめざして来た我々にとって京大との試合での辛勝は暗黙のうちには不安と、我々の甘かつた事を思い知らされた。今更。敢然と捨身で立向うのみ。だが立命も強かつた。巧みな試合はこび、試合のセンスは我々より一段勝つたものを感じさせられた。腕力とも思われる程の逞しいダッシュ、職人的と思われる程のテクニク。数年来連続一位という伝統と私学根性をみせつけられる思いであつた。1-8という結果であつた。虚しい思いで帰途についた。結果は惨敗であつた。京大に勝つたとは言え、それはたとえ京大が強くなつたことにはあるにせよ、決して我々にとって満足できるものではなかつた。数年来圧倒していた神大が京大にこの辛勝である。我々は関西一位、全日出場を目ざしていたはずである。だがこれに続く水球戦にとって貴重な経験であつたことはまちがいない。この試合以後練習方法を大きく変え、基礎の重要さを再確認し、続く三商大戦を経て布陣の大きな入れかえを行

ない、はじめて神大として一応まとまった（？）水球チームを作る事になる重要な第一歩であった。

追 記録が残ってない為、詳しい事がわからないのが残念である。

### 才十三回

## 京阪神三大学水上競技大会

30年5月31日 於 大阪プール

この惨敗ぶりは何としても口惜しい。一体このような結果ができた原因はどこにあるのだろうか、実力の差と言えないこともない。しかしこれ程、阪大、京大に差をつけられるというのは、もっと根本的な反省すべき点があったからではなからうか。今思ってみると、戦う以前から部員全体の中に「今度の試合はいくら頑張っても敗けることは決まっているのだ」というあきらめの気持があったように思う。このことがすでに大敗を喫するということに約束しているようなものではないだろうか。一体一つの試合に臨むときにどうしても勝つんだ、という眸としては向う見ずと思えるような勝つことへの執着がなければ、試合にでても結果は明らかである。そういう執着があってはじめて進歩があり、普段の練習にも身を入れてやるということになってくると思う。ともかく来年の三大学定期戦には必ず勝つという気持で試合に臨みたい。

1.	四〇〇米継泳	山内、宮部、片平、丸山	四分三二秒二	三位
2.	四〇〇米混継泳	木下、大崎、阿部、丸山	五分一五秒〇	三位
3.	八〇〇米継泳	石原、樋口、山内、丸山	一分三九秒三	三位
4.	二〇〇米背泳	木下	三分一〇秒五	六位
5.	二〇〇米平泳	阿部	三分〇四秒七	三位
6.	二〇〇米蝶泳	日野	三分三二秒二	六位
		阿部	三分〇一秒一	三位
7.	一〇〇米自由型	山内	一分〇九秒〇	四位
8.	四〇〇米自由型	山内	五分五四秒二	五位
		石原	五分四一秒八	四位
9.	八〇〇米自由型	石原	一分一四秒八	四位
		樋口	一分三九秒四	五位
10.	四〇〇米個人混泳	前田	六分四九秒〇	六位

合計得点 二六六

(片平記)

関西インカレ

対大阪市大定期戦

昭和19年 第44回

例年なら八月の下旬に行なわれる関西インカレ戦が、オリンピックの關係上、六月十二日、十三日の二日間大阪プールに於て早くも行なわれた。勿論、三商大戦と並び神大水泳部きつてのメインイベントである。我々は六日から強化合宿に入ったが、六甲山の冷たい水は調整をはばみ、全く苦しい合宿であった。そんな条件の中にあつて、最上級生の丸山さん、石原さんの好調さが印象的であつた。

いよいよ試合の当日である。主力の丸山さんが就職試験とかで第一日目は出場できなかった不利にも、その穴をよくカバーし、久しく勝てなかつた府立大を抜いて四位を守り、第二日目に備える。この日も府立大との得点争いは一段と激しくなり、府大の光永君が四百米自由型で三位に入賞すれば、我等も丸山さんが百米フリーで二位を得る。一進一退はついに最後の八百米リレーにまで持込まれたが、神大勢よく頑張り四位を死守する。

その他に記すべきことは、我らのよきライバル京都大が晴々しく一部に昇格したことと、三部にあつては、層も厚く好泳者をそろえた広島大が優勝した。来年は警戒すべき相手である。

全員昇り調子であつたから、市大戦の勝算は十分であつた。しかしどれ位で勝つか、それが問題であつた。

四〇〇米継泳	神戸大学	五分〇五秒三	一位
一〇〇米自由型	丸山	一分〇五秒四	一位
	片平	一分〇五秒六	二位
	山内	一分〇八秒五	四位
二〇〇米平泳	山口	三分一八秒〇	四位
	阿部	三分〇二秒〇	二位
	大崎	三分〇〇秒二	一位
	日野	三分〇六秒三	三位
二〇〇米蝶泳	中畑	三分〇五秒九	二位
	阿部	二分五七秒三	一位
	前田	三分〇七秒二	二位
二〇〇米背泳	横田	三分一四秒二	四位
	木下	二分五九秒六	一位
	日野	二分五六秒二	二位
二〇〇個人混泳	小越	二分五五秒二	一位
	片平	二分五七秒七	三位
八〇〇米自由型	石原	一分三八秒六	一位

## 関西国公立戦

樋口	一二分一〇秒五	二位
手嶋	一二分一三秒四	三位

競泳一、二位を独占し、圧倒的といつてよい勝利であった。

水球においても一点は許したが大差で勝利をおさめた。

市大戦には毎年多数の先輩が来てくださる。試合後のミーティングでは全般に精神的なゆるみが見られることが強く指摘された。

2.	一〇〇米蝶泳	阿部	一分一五秒〇	四位
3.	二〇〇米自由型	片平	二分三五秒二	七位
4.	四〇〇米継泳	山内、宮部、片平、丸山	四分三一秒九	三位
5.	四〇〇米自由型	石原	五分三〇秒〇	五位
6.	二〇〇米蝶泳	阿部	二分五一秒八	三位
7.	一〇〇米自由型	丸山	一分〇六秒九	四位
8.	八〇〇米継泳	手嶋、山内、丸山、石原	一〇分二六秒四	四位

(阿部記)

## 三商大戦

八月十七日。恐しく暑い日であった。神大水泳部の精鋭は、緑陰の六甲台プールから、砂漠の中の府大プールへ出かけて行った。今年は三商大戦にそなえる合宿の途中にこの試合があったため、なんとなくファイトの湧かない試合となった。全国大会につながるこの重要な試合よりも三商大戦に重点をおいているのが、我部の低迷する大きな原因ではないだろうか。他の試合も三商大戦などの意気込みでかかったらと思うのだが。

1.	八〇〇米自由型	石原	一分四一秒九	三位
	手嶋		一二分〇八秒六	五位

「遂に明日は我々神大水泳部のメインイベント三商大戦である!! 関西国公立戦が終るや我々は、出来る限りの努力をしてきた。後はベストをつくすだけだ。」こんな主旨の言葉があつて最後のミーティングが始められた。驚く程綿密な作戦が出来上つておりしかもその計算によると、我方に有利という結果が出ている。僕達は喜しくなるというよりホッとして互いの肩を叩き合つて明日

の健闘を誓い合う。ミーティングは尚も続き、竹内さんの助言も手伝って、主としてポロにおけるフォワードの動き方からバックスのマークの仕方まで細にわたる作戦が出来上る。その夜は高敷る胸を抑えつつ十時に消燈。

一夜明けると武蔵野の林にボッカリと白い雲が浮んで絶好の試合日和である。僕は朝食をしながらもう一度授かった作戦を反復してみる。大緊張もしてない様だ。「これならやれる」午前十時、四〇〇米混雑泳のスタートである。我チームは五分を切る神大新記録でのすべり出してゐる。一ツ橋には惜しくも敗れたが、予定の行動さ、気にしない気にしない!!、次の四百米自由型において早々と逆転しそのまま寄り切る横綱相撲で楽勝である。休む間もなくポロの試合が再開された。初戦の市大を一蹴、続いて一ツ橋戦である。我軍必死の攻防にもかかわらず相手フォワード切連君の巧妙な技になすところなく敗退し、二位に終る。

1. 四〇〇米メドレーリレー

神大 二位 四分五七秒七 (山内、大崎、阿部、宮部)

一位 一橋大 三位 大阪市大

2. 四〇〇米フリー

石原 一位 五分一七秒四 (大会新)

手嶋 二位 五分二七秒四

3. 二〇〇米ブレスト

阿部 一位 五分五九秒三

大崎 二位 三分〇二秒七

4. 二〇〇米個人メドレー

片平 三位 二分五二秒六

日野 四位 二分五八秒五

5. 一〇〇米フリー

丸山 一位 一分〇四秒六

片平 五位 一分〇七秒五

6. 八〇〇米フリー

石原 一位 一分二四秒四

手嶋 二位 一分三二秒八

7. 二〇〇米バタフライ

阿部 一位 二分四九秒〇 (大会新)

日野 二位 三分〇〇秒五

8. 八〇〇米リレー (手嶋、山内、片平、石原)

神大 一位 九分五八秒四 (大会新)

競泳の部 一位 神大 八三点

二位 一橋大 六七点

三位 大阪市大 二八点

水球の部 神大 22 1 1 市大

一橋大 1 1 7 一橋大

# 水球リーグ

於 大阪府立大プール

時 八月一日・二日

三商大戦が終ると間もなく、我々ポロメンは関西学生水球リーグに備えて強化練習に入る。たとえ三商大戦に破れたとは言え、打倒立命は神大水泳部の大きな目標である。しかし三商大ボケは否定しがたく、このあたりにも大きな課題が残されているようであった。

さて試合当日、市大、京大を連破した後、対立命戦を迎えた。レッツゴー、ゲームは一、二、三クォーターまでは、二対二の同点、息づまるような興奮の内に、最終クォーターが始まる。ゴール前のちよっとしたミスが命とりとなって一対〇で第四クォーターは終了。又も立命に名をなさしめた。全く口惜しい試合であった。

## 才 三 次 合 宿

第三次合宿（八月二十一日～二十七日）は、例年の如く、遠征合宿である。兵庫県大河内町長谷。姫路から播但線で約一時間。きれいに植林された山々に囲まれて、川が清澄な水を集めて流れ

る静かな山間の町である。

総勢十六名。土肥さんという家にお世話になる。神戸大学水球部の寄宿は二度目だせうで、家の人の態度にも、どこことなく親しみがある。

プールは名付けて清翠園（ヘルスセンター）プール（五〇米）。プールに沿って清流があり、その清流を引いて虹鱒の養殖が行なわれている。虹鱒の肌を洗った大変冷たい水がプールへと注ぐ。

さて練習は例年のように、四年生が隠居して、三年生が指揮をとる。

午前ーロング八百をいし千。百インターバル十本。五〇米ダッシュ四本。ロングには制限タイムが付き、ダッシュ増しが控えている。

午後ー昨年の三次合宿から行なわれ出した、前田さんの提唱による四百個人メドレー。全体の筋肉を鍛え、ポロへの備えとする。その後はいつものポロの練習。巻き足、乱パス、寝返り、対面パス、ドリブル、ポロ泳法、顔上げダッシュ。

二十日間のブランクのためか、山水の冷たさのためか、気候の悪いせいとか、とにかく、全体に低調で、スイスイと心持ちよさそうに身をくねる虹鱒を恨めしそうに横目に見ながら、二十四日の夜を迎えました。

この夜、思いもよらぬ珍客が僕等を訪問してくれたのです。台風十四号。連日、小雨まじりの曇り空が続き、今合宿の低調の一

因を成していたのですが、これは他ならぬ彼の影響でした。

夕方から風雨が強くなり、彼の訪問を告げました。夜に入るとドド、ゴロゴロと何か地響きのような、異様な音がします。雨。川の増水。大きな岩の濁水に対する抵抗のうめき声でした。皆、真暗な室の中で何となく心細そうです。そこへ土肥さんから「川縁の診療所が危い」と神戸大学の出勤を要請されてきました。皆はっとして、何か重大な使命でも下ったかの如く、寒いのを我慢して、水泳パンツを。懐中電燈を頼りに、雨が烈しく吹きつける中を診療所へ。診療所では、廊下のすぐ横を、その床の高さを、ものすごい勢いで濁流が走っていました。螢光灯で照らされたところは、わずかな部分に過ぎませんでしたが、その恐しさを伝えるには充分で、もし、あそこへ落ちたなら……。

家財道具を運び出すという事で、玄関に、色とりどりのパンツを震わせながら待機しておりましたが、女主人らしき女医さんは、淡々としたもので、「運び出したところで……」と僕等に用はなさそうな口振りで。結局、パンツを一層震わせただけで、すこすこと引き上げ。土肥さんの「御苦労さん」の言葉も空矢の感。飛んだ臨時防団でした。しかし、沸かして下さった風呂で震えを止めて、寝る頃にはゴロゴロ音も大分治まり、台風も下火になったようでした。寝床の中で、濁流の印象について話し合いましたが、その中で「あのプールも駄目だろうな」という、うれしうな声も聞かれました。

台風一過。翌日は昨夜が嘘のようです。それでも、増水して容易に減らない濁水が昨夜の名残りを物語っています。我々の気になるプールは期待（？）通り、ひどい惨状で、濁水と泥。

プール掃除をすまし、神戸へ帰り、残る二日間をホームプールに没す事になりました。プール掃除は泥との戦いで終始。それも面白い事が一つありました。魚取りです。プールに入り込んだ虹鱒一匹三百円也。自分のものにはならないとは、わかっていても、そこは稚氣旺盛なる我等一同。三十センチ以上もある大きな奴が足にぶつかるのを、黙って放っておく筈がありません。幼い頃の「かいどり」を思い出し、なかなか痛快でした。

長谷を後にする汽車の中、何故か皆の顔の筋肉が少し緩るんでいる様な気がしてなりません。そしてその顔が「台風も又よきものかな」と語っている様でもありません。

ホームプールでの二日間は相変らずの低調。最後に、ポロ紅白試合を行なって解散。

とにかく、本来、練習の報告たるべきものが、台風を語らねばならなかったように、合宿自体も台風に禍い（？）された飛んだ合宿でした。

(由良記)

# 才二回近畿地区国立大学 体育大会水泳競技

時 八月二十九日

於 大阪大学石橋プール

四〇〇米混継泳 (木下、後藤、阿部、丸山)

神大 三位

五分〇八秒五

八〇〇米自由型

石原

四位

一分四八秒〇

二〇〇米蝶泳

阿部

三位

二分四四秒五

二〇〇米自由型

片平

三位

二分二八秒四

二〇〇米背泳

木下

三位

二分五三秒二

二〇〇米継泳

前田

四位

三分〇五秒二

二〇〇米自由型

神大

三位

一分五七秒二

四〇〇米自由型

手嶋

四位

五分三六秒六

一〇〇米蝶泳

石原

五位

五分三六秒八

一〇〇米自由型

阿部

四位

一分一三秒九

一〇〇米自由型

丸山

二位

一分〇四秒〇

一〇〇米背泳

片平

六位

一分〇六秒七

一〇〇米背泳

木下

四位

一分一九秒六

八月二十九日午前阪大の入口につき、それからかなりの距離を  
ぞろぞろと石橋プールまで歩く。プールは新しく見えたし、おま

けに浄化装置もついていた。長谷の合宿が雨で流れ、六甲台プールの冷水で泳いでいた身にとっては、それが飛び込んだ瞬間何とも言えぬ快い感じだ。

偉い先生の大会宣言で近大水泳競技が始まる。試合は快よく進み多少の遅れを含んで無事に終了、当番校の阪大の皆さん御苦労様でした。

試合は無事にすんだが、あまりにも無事すぎた。この文の意味は勝手に解釈してほしい。

常に京大、阪大に続く3位という状態、決して満足すべきものではないが、又自分の云いのがれとして受取られても自分に云訳ができる実績がないのでしかたないが、この状態の原因は部員不足だと思う。正直いって、現在の練習は出来るだけのことをやっていると思う。あとは才能のある部員がたくさんいないことのみである。現に自分のような者を試合に引出すのもそのことによるものと思う。

以上近ごろ上級生の話を聞いて思ったこと。

## 兵庫県学生選手権水泳競技大会

時 八月三十日

於 神六六甲台プール

四〇〇米混継泳	三位	神大	五分一五秒八
四〇〇米個人混泳	五位	日野	六分二五秒三
八〇〇米自由型	五位	手嶋	一分二二秒一
	六位	樋口	一分二五秒〇
二〇〇米背泳	三位	木下	二分五三秒〇
二〇〇米自由型	五位	久保	二分四三秒四
二〇〇米蝶泳	六位	阿部	三分〇三秒八
二〇〇米平泳	四位	後藤	三分一〇秒〇
二〇〇米継泳	三位	神大	一分五九秒二
四〇〇米自由型	五位	石原	五分三六秒三
	六位	手嶋	五分四六秒四
一〇〇米背泳	四位	木下	一分二〇秒〇
一〇〇米自由型	三位	丸山	一分〇四秒六
	六位	片平	一分〇八秒八
一〇〇米平泳	四位	後藤	一分二五秒六
八〇〇米継泳	三位	神大	一〇分五〇秒五

した次第。試合終了後関学とポロの試合、これのときも体力のちがいを感じた。つまるところこれまでの目標でありこれからの目標でもあるスタミナ作りに勢を出すこと、それから部員不足をいかに解消するかが大切なことだと思ふ。皆さんはどうですか？

(由 佐)

### 京阪神三大学ジュニア一戦

これで今年の競泳の試合は最後、いわば納会ともいふべき京阪神三大学ジュニア一戦がやってきました。場所は阪大教養部プールです。各大学ともこれで最後という気持か、ゆったりしたムードの内に試合が開始されました。つい二日前近畿国公立体育大会がプールとはおもえませんでした。今まで京大、阪大にはいつも苦敗を喫しているの、この試合こそはという気がみなぎっていましたが、やはり実力の差はいかんともしがたかった。

試合内容で特筆すべきことは、フリーの宮部さんがプレストで一分二二秒台を出し、ちょっといきなところを見せました。来年は百フリーの他に四〇〇米個人メドレーにも希望をもたせてくれました。又マネージャの競泳で我が神大が勝って、ちょっとすっきりしました。これで競泳は終了し、のこるは九月六日の対京大ポロ定期戦だけです。

さあ、明日からポロガンバロー。

(後 藤)

## 対京大水球定期戦

苦しかった、そして又楽しかったカップバ生活も、今日の対京大ボロ試合で終止符を打つのだ。前田首将の堅い顔、丸山兄の心配

そうな顔、山口兄の石原兄の横田兄の顔々々……。我々の最後の試合を勝利で飾らねばという意気込みが各々の顔からうかがわれる。

試合は最後になって抑されたものの、終始優勢のうちに終わった。

京大四点、神大六点。

植中杯は前田キャプテンの手に。

四年生の顔が印象的であった。

九月六日 日曜日（京大プールにて） 手嶋 記

## 新入部員勧誘状況

本年度の入学式が四月十二日、六甲台学舎において行なわれた。我々水泳部員は、部の強化のため、有為な人材を求めて、出張所をもうけ部員総出の勧誘を行なった。結果、十七名の多きが入部を志してくれ、その中には、平泳百米に一分一七秒に記録を持つ者もあった。

## 陸トレについて

北山清昭

十月末を境にして、プールの水とも別れ、サイドの冷たいコンクリートとつき合う事になった。陸に上がってしぼられるのは覚悟の上であったが、しかし多種多様ないじめ方があるものである。パーベル、タンベル等の近代兵器やら、坂道のランニングと言う古典的なスタイルに至る強烈なる攻め方である。柔軟体操でペアになる顔が、キヂストの権化みたいに思われて来る事さえある。とりわけ姫路から出て来た我々にこたえたのは、坂が多過ぎる事である。登りばかりである。どうやら「天は人の上に坂を作った」様である。有料道路のゲートまで走る時、大げさに言うならそのまま永遠に続くのかと思われる。ここで思わず休んで歩きたいと言う衝動にかられる。この誘惑に打ち勝つためにもトレイニングを続けているのだと思いつくが、現実には、やはり一休みと言う事もある。もちろん完走するものも多勢いる。「苦あれば楽あり」とは良く言ったもので、たまにはランニング中に麗しきメッツェンに会える事がある。顔をゆがめて「ゼイゼイ」言いながら走っていた時、二人の女性から「頑張って、しっかり」との激励、これには、苦しいのも我まんして、ピッチもあげようかと言うもの

である。

色々と思痴っぽい事や、ふざけた事を書きましたが、陸トレをふり返ってみる時、真剣な反省が為されるべきと思う。極く当然の事ながら、陸トレの目的とする事は、来期の基礎体力を養成する事であろう。しかし又一元では、四月から約半年に亘る練習オフと言ひながら多分に骨休みの面も認められるべきかもしれない。しかし、実際十一月から行なわれた陸トレを見ると、連日の日誌で上級生の方がなげいておられるのに見られるが如く、集まりが悪すぎたのではないか。特に下級生にその反省が求められるべきと思われる。練習を長期に亘って出ないのは、個人的な理由があるかも知れないが、サークルと言ひ一つの内に入つたからには最低のルールは守るべきと思う。余りにもシーズンオフと言ひ考へ方が徹底し過ぎたのではないか。

来期への反省の材料にされるべきと思う。

## ハイキングとダンスパーティー

宮部 記

長かったシーズンも終りをつけると、あの熱気と興奮を醸し出したプールも、今は何事もなかったかのようにその豊満な身体を横たえている。陸トレに励む我々も、来るべきシーズンの未だ速きを考えると、ついつい出すべき力を惜しむ結果となってしまう。

そんなある日、確か十一月の二十三日であった。予て申込んでおいた松陰女子大の有志の人達と修法ヶ原へ合同ハイキングを催した。当日は秋晴れの好天氣に恵まれ、絶好のハイキング日和である。日頃のうつろな表情とはまったく違つた河童連の目の輝きには我等幹事役も、ホット一息といったところであつた。真黒にこけた御飯の上にカレーをかけて、それでもおいしそうに食べている表情は、合宿中の飯の悪さをなげく事など想像もつかない。男って全く勝手なものである!! 女性とのコネクションが出来ると、今度はダンスパーティーをやれとの声が部内に高まる。部の娯楽係をつとめる久保と小生は、又も松陰へ日参することになつてしまった。ある時は下からやさしく、ある時は強引に掛け合い、十二月十五日石屋川の御影公会堂にて行なうところまでこぎつけた。さて当日、定刻の六時を過ぎてても彼女達の姿は現れない。上級生の人達はムツツリとしているし同僚や下級生はブツブツとこぼし始める。ここで彼女達が来なけりゃ裸踊りでもやるさと気軽に考へていた我々も、十分、二十分と時間が過ぎて行くにつれて一層不平が強くなると、ますますあせつてくる。やがて寒風に待つことと三十分余り、やっと女性が現れ、タンゴ、ルンバ、ブルースと踊りが興に乗り始める頃、やっと裸踊りから我々は開放されたのである。来年は是非、古林先生や田口先生に来ていただいて、ブルースやツイストの妙技を御披露願いたいものである。来年の娯楽係はたのむぜ!!

(宮部 記)

## 水泳部に帰って

S 14 宮 本 義 勝

近頃は随分寒い日が続き毎日の様に雪が強風に舞っています。どうも水泳部には相応しくない天候です。色んな意味で暖かい日が続かれます。ほくは2年の一年間全く水泳部をやめていました。3年になってノコノコできてはやくも一年になろうとしています。なぜ頼まれもしないのに3年になって再びやりはじめたか、少し書いて見たいと思います。もちろん色々な理由があったのですが、その中で一つを選ぶとすれば次の事です。今から三年前、1年の時姫路で六月頃水泳部に入りました。入部した当時はよく練習をさぼりましたが、夏休みの遠征合宿には人並に参加しました。四国の鴨島で行なわれました。ほくが3年や4年の人と一緒に練習したのはその時が初めてでした。当時水泳部全部の中でほくより泳ぎのへたなのはさすがに居なかつたようです。4年生の人にずい分泳法指導をしてもらいましたが、思うようにうまくありませんでした。そのように4年生などと一緒に練習して感じた事は次のことでした。「四年間水泳をやり通した人はやはりどこかえらい所を持っているものだ」と。このことは今でもよく感じることです。これが種々の形でほくを水泳部から去り難くしている

ものです。たしかに四年間真面目にやりぬくことはずいぶんしんどいことだと思えます。その証拠に近頃では2年まで残るのが入部したうちの半分いれば良い方だということからもうかがえます。ほくもその他多勢の部類で2年になるといつのまにかやめています。ところが日がたつにつれてやめたことを後悔するようになりました。そのうち3年になり水泳シーズンへとは言っても四月なかばですが）に入って居ました。話に聞くと姫路で一年先整であった丸山さんをはじめ3年生の連中も多く続けていると言ひ事だったので、もう一度やることにしたので。あい変らず泳ぎはへたですが、よく練習に出て、最後まで頑張るつもりでいます。

(昭和四十年一月十五日)

## マネージャーを終って

T 14 真喜志 好 一

申し訳ないの一語につきます。神大水泳部史に一大汚点を残したのではないかと思えます。先代マネージャーの横田さんに競泳会の会費集めを手伝ってくれと言われたのが二年の初め、午前中の授業に出る気がしなかつた頭で軽い気持ちで引受けました。サブマネージャーを経て、二次合宿あけには一年間マネージャーをやっ

てみないか、いや、やれるかとのこと。迂闊にもやれると思いましたが。泳ぎでものにならないなら台所を一生懸命にやっただけです。事実当初は張り切っていました。生協からしきりに合宿費の請求書をつきつけられた以外はたいしたへまもしませんでした。部員に対して腹をたて乱暴なことさえする程（変な言い方ですが）頑張っているつもりでした。ところが昨シーズン合宿インの日までフトン申し込みを済ませてない等、いくつかの大失敗を続けたのです。

時間のルーズさで僕よりヒドイのは僕自身会った事がありました。それはマネージャーとしての第一の条件にまづ失格だったのです。他のあらゆる点でもルーズという思わしい外来語は僕につきまといまいます。ルーズさを確認、なおさなきや：：再確認：：絶対に：：再々確認。最上級生になろうとする現在でも直しきれません。それどころかますます悪くなる一方です。中畑君が「忙しいやろ、代わりか」と言ってくれた時は、情なくもほっとしたものです。霞のように居ても居なくてもいい存在にはなりたくない等と欲張っていた自分が逆にスモッグのような有害無益な荷物になってるのはなんとも皮肉です。スモッグよりカスミの方が風情があるかと思うこの頃です。そんな僕をマネージャーとしてたてて下さった先輩諸兄、部員諸君にお礼の申しようもございませぬ。残るシーズン悔いのないように過したいと思えます。と言いつつも陸トレを大分さぼってしまいました。

## 雑 感

B 14 中 畑 勝 明

「光陰矢の如し」のたとえの通り、早や三年が過ぎようとしてゐる。決して満足を三年ではないが、ホッとした安堵の気持がある。

私は後を振りかえるのが好きだ。自分の歩んできた道、自分が体験した過去を。過去は人を感傷的にする。感傷はある満足を私に与える。たとえ過去が自分にとって充実したものでなかったにしても、過去の失敗はもはや屈辱でもなく、みじめでもない。屈辱、みじめとなるのは野心があり、期待があったからだ。しかしもはや過去の失敗はてれくささとなり、笑い種となる。そこから未来に対し、野心、期待は、謙虚な、そして思慮深い、しかし勇氣ある態度となり、また闘志となるだろう。

過去を顧みみずして、未来の成功はありえない。人は一歩進んで立ち止まり、その一歩を顧みることが大切だ。私にとって残された一年、充実した悔いのないものにしたものだ。

ところで私は、今シーズン真喜志君から引継いでマネージャーを務めることになりました。これはまったく突然のことで、今ま

で泳ぐことだけしか考えてこなかった私が、その責務を充分果せるかはなほ疑問ですが、この一シーズン微力ながら水泳部に居たいと思います。なお副マネージャーには吉川君（E 16）に努めてもらいます。なに分未熟を私達ですので、今後よろしく御指導御鞭撻下さるよう、先整各位にお願い申し上げます。

## 練習の目的

T 15 阿 部 洋 三

高校時代に、国語の成績を良くする為に小説を読もうとした奴がいた。だが幸か不幸か、そんな事は長つづきせず、結局途中で読むのをやめてしまった。受験を目前にすればどうしても、こんな考えに陥るのかもしれないが、読解力を養う為に小説を読むなんて馬鹿げた事だ。

ところが、世の中にはこんな考え方が平気で通っている様に見える。（もともとこの見えるのは、自分の目がおかしいのかもしれないが。）

試合に勝つ為に、他のすべてを犠牲にする。試合に勝つことのみが、至上命令であり、練習の目的となり、講義をサボッテ朝から泳ぐ。大学は講義に出ることを強制されない所だ。出る出ない

は本人の価値感の定めるところだ。だが合宿に参加する事を強制するのは誰だ。部の規律なるものをふりまわすのは。読解力を養成する為に、小説を読んでも面白くないのと同様に、試合に勝つ為に練習しても楽しくはない。小説を読めば、読解力がつくだろうが、それは小説を読む事の実際の目的に専心する事の副産物でしかないはず。水泳においても、試合に勝つことは、同様な副産物であり、一年の大半を占める練習の中に本質が存在する事ぐらい誰れでもが体で理解していることと思う。だから練習は水泳をやる事の本質に従ったやり方を追求すべきだと思うが、この考え方は試合に勝てないだろうか。オリンピックの水泳選手が、半プロのような練習をしながら勝てなかったのは、選手が水泳をやる事の本質を見出さなかった為ではなかったのか。本質を見出していたら、自己最高ぐらいは出たと思うのだが。試合の勝敗なんて相対的なものだから、そんなものを目的にして練習をすべきではないと思う。

## 反省

T 16 雲 田 晃 平

むせるような暑さに駆りたてられて、今日もプールに行く。このことが僕に水泳部を続けさせた第一要素かもしれない。入部一

ヶ月たらずで、すでに自分の能力もここまで、というよりよい気がして、泳ぐことへの意欲を失なっていたのも事実である。元来、泳ぐことの好きで、又、事実、他の運動はいざしらず、泳ぐことは決して、他の者にひけをとらなかつた僕には、大きなショックであつた。「井の中のかわず、大海を知らず」、全くその通りであつた。

でも、この一年をふりかえてみて、水泳部生活は楽しかつた。(初めての運動部生活に多少の不安はあつたのだが) 初めて一〇〇を泳いだ時、七五あたりでへばつてしまつたこと、三〇〇〇を一時間あまりかかつて泳いだこと、八〇〇で、二・三度、一分近くタイムを縮めたこと、合宿、又、試合といえば、時計係をしたこと等々、いろいろと後悔することもあるが、まずまず満足している。では、来シーズンの希望を、練習には毎日行く(三期はすこしひまなので、実行できると思ふ)、合宿には必ず参加する、タイムは八〇〇:十二分台、四〇〇:五分三十秒台、一〇〇:一分十五秒。

## 楽しさ思ふ出

五 16 吉 川 和 之

「水泳」最もたくましいスポーツの一つである。ギラギラ光る

太陽の下で若い生命を水にぶつけるスポーツであると、思う。ところが水泳部に入つた理由の一つにもこの魅力があげられる。今も一つの理由は、クラブの持つ雰囲気である。練習あり、コンパあり、合同ハイキングあり、等々……。今シーズンをふりかえてみると、楽しかつた事、苦しかつた事、くやしかつた事、いろいろあつたが、特に楽しかつた事のみを記しておく。まず新入生歓迎のコンパ。何せ大学生活始めてのコンパゆえ、出る歌、出る話、出るおどり、おかしく全く楽しかつた。二次会での食気と色気とに分れた行動。今から思えば思わすふき出す。しかし楽しい事といつても、シーズン中は「苦しき事のみ多かりき」である。五月、六月の冷めたい水の中にとびこむのはつらい。「一体何のためにこんな事をしたければならないか」と思つてみたりもする。しかしそのつめたい水の中を泳ぎきつた後の痛快な気持は、スポーツマンのみ知る喜びである。当時つらかつた食事の用意も、今から思えば何だかなつかしいような気がする。だが長谷遠征合宿には参つた。五日目に台風に出くわしプール使用不可能、おまけにプールせうじまでして帰つてきた。半教がかぜをひいていた。今シーズンはオリンピックがあつたせいかな主な試合も早い目に終りシーズンオフが早かつた。それだけに、マジシャン、パチンコ、ダンス、ボーリングと大いにはめをはずすことができた。クラブ単位としても2年生が中心となつて、合同ハイキングやダンスパーティーなどを催してくれて楽しいオフをすごせた。

## 陸上トレーニング

E 16 後 藤 嘉 徳

水泳にとって冬の陸上トレーニングの重要な事は言うまでもないし、皆わかっているのに出席が悪い。事実、僕自身もあまり出席しなかったが。高校時代には授業の終る時刻が同じで、それだけに、まとまりがあり、人数も多く、なかなかサボル事ができにくかった。しかし大学の生活は各個人の自主性を基本としている

ので、なかなか集まりにくいのである。何か良い方法はないものであろうか。小人数でやっては、もり上がりもないし、何かわびびしい感じがする。こういう事がだんだん悪くなって、ずるずるとどろ沼にはいりこむようになっていゝるのではないだろうか。ぼく自身は、どうしたら一番得策かまだわからないが、みんなまで考え合うのは必要である。しかし、今日から今シーズンの為の陸トレが始まったが、昨年までの内容と比較すると、いろいろ変っている。特にサーキットトレーニングを取り入れた事はクリーンヒットだと思ふ。

今までの陸トレは体の部分部分にこだわって全体をないがしろにするような傾向にあったと思うんだが。そしてその陸トレの休けい時間にボロの話をするのも大変よい事だと思ふ。ぼく達はボ

ロのボの字も分かっていないんだから。さて今まではすっかりとはいかないが、かなり変った内容の陸トレが始まったが、きっと神大水泳部の向上の基礎となるだろう。しかし昨年も今年も変らないのが、陸トレの苦しさ、しんどさ。

しかしこういうのんきな事は言っておれない。新シーズンはもう目の前にきているんだから。さあ、ボク達も新2年生になんとかなりそうである。新入生と上級生の橋わたしの役としてがんばって水泳部のためにやろう。六甲山もがんばってやれ、とにこやかに笑っている。親父のようだ。この親父に笑われまいように今年もガンバロー。

## 競泳のつらさの中に何が？

B 16 大 崎 幸 彦

競泳とはつらいものだ。自分は競泳を始めてからもう九年余りになるけれど、でもすばらしいもの思っている。競泳のあのつらさの中に何か、ある人間として、肉体面の美しい、純粹な境地があるように思えてならない。二百米で一二〇〇五〇、ゴールの一刻前、手足の筋肉を力の限り振り振りしほり、それ以上に出さねばならない時の心はトポロジ―場面を超越した人間らしさがみられ

る。それは、自分は人間だ、人間なんだという事を神に主張しているようにみえる。その姿は一位になる事が目的ではない。そこには人間の肉体の限界に対する一つの冒険が存在する。レースの結果が何位であろうと、泳者のその冒険にこそ賛美したい。なぜなら、前に述べたように、そこにこそ人間の肉体面に於ける人間らしさがあるからだ。

確かにサークルという場を手段として人間らしさを求めているのだらうが、自分達は現在大学生である。学問を放棄して置くわけにはゆかない。一般教養、専門科目の学問を追求してゆかなければならない。自分でいえば、社会科学から経済学、経営学、会計学へと求めていかななくてはならない。たどえ自分の能力を信じられないと思いつつも求めていきたいのである。そして人間の理性の面に於ける限界をどこまでもきりつめていきたい。

こうしてみると、自分が考えるに、運動サークルで人間の肉体面に於ける限界を求めていく様に、学問を追求することによって人間の理性限界をどこまでも求めていく事に於いて、大学とは両方を提供している場の様に思える。これはなにかあの人間性を喪失していた中世から脱却したルネサンスの神髄を、大学というところにハッとみつめられるのである。

自分達が現在の大学をどの様にもみつめているか、間違つて認識しているのではないかと思うと、不安でならない。



「お知らせ」

今度、学部十二回の岡本忠男氏がアメリカ旅行記を出版されましたので別記の通り御紹介します。読泳会員の希望者の方々には、一冊四〇〇円（市価四五〇円）にて御購入して頂き、四〇〇円のうち一〇〇円は水泳部に寄附して頂くことになっております。水泳部まで御注文下されれば、本年度会費を御受領させていただく際、御持参させて頂きます。

「二十日のアメリカ旅行」

「自由の女神が呼んでいる」この新刊は、昨年、京都実業団、北米視察旅行の一員に加わって北米各地の産業文化を視察した時の岡本氏の旅行体験記を記述したものである。著者もあとがきに「この旅行記は私一個人の目で見たまを、耳で聞いたまを、頭で考えたまを、記述したものであって、アメリカの生態にメスを入れようとか、アメリカの最近の政治経済の動向を捉えようとしたものではない。一時訪問者として、アメリカを旅行し、長く住んでいる友人・知人の話に耳を傾けながら、アメリカを眺め、アメリカの歴史をひもときながら見て考えたことを、旅行記の中に織り混ぜながら記述したものである」と説明している。

アメリカ大都市を旅しながら、アメリカ人の気質、生活、宗教、歴史、更に黒人問題、ハワイの二世、三世の様子を初旅行らしく、飾り気のない軽快なタッチで記述している。

全文三百四十六頁、写真百十数、各都市（日本字の地図）十数を挿入し、加えて巻末は「知っておきたいアメリカ旅行の心得」も書かれてある。これからアメリカに旅行する人にも、ゆかない人にも一読すれば充分参考になることがあると思う。

三十九年十一月中旬全国市販（四五〇円、東京都文京区森川町有信堂発売）

# 現役部員ベストタイム表

1965・5・12現在

	100m	200m	400m	800m	400m 個人メドレー
Free					
樋口		2-38-0	5-50-0	12-01-0	6-55-0
手嶋	1-13-0	2-32-0	5-27-0	11-34-0	
宮本	1-27-0		7-03-0	14-52-0	
山口				14-05-0	
小越					
宮部	1-06-8				7-10-0
久保	1-09-6	2-43-4		12-39-8	
立石	1-30-0			15-59-0	
由良	1-16-0		6-50-0	14-20-0	
片平	1-05-6	2-29-0	5-42-2	11-50-8	
山内	1-08-5	2-28-4	5-39-2	12-04-2	
雲田	1-22-8		6-50-0	14-31-8	
Breast					
阿部		2-59-0			6-42-0
北山	1-50-6	4-08-0			
大崎	1-26-0	3-00-2			
後藤	1-26-2	3-07-2			
吉川	1-26-8	3-11-4			
Butterfly					
日野	1-18-8	3-00-5			
中畑	1-22-0	3-03-2			
阿部	1-10-2	2-44-5			
Back					
木下	1-19-0	2-52-7	6-20-5	12-59-0	
由佐	1-30-0				8-01-0

# 凌泳有志コンペの記

昨年月見の宴の二次会で、此度制定された会則第三条に則り「会員相互の親睦を図る」手始めに有志のゴルフコンペをやるうと云う事になり暮も押つまつた十二月二十七日（日）淡路カントリークラブに於て第一回凌泳コンペを開催致しました。

前日はクラブロッヂに泊り先づ麻雀で全員のコンディション調整し、翌二十七日は早朝七時起床、冬には珍しい快晴微風のゴルフ日和にめぐまれ、新装なった雄大なコースで心ゆくばかり日頃の腕を競い、冬の日が西の海に沈む頃やっと2ラウンドを終了、六時半の船で帰途につきました。

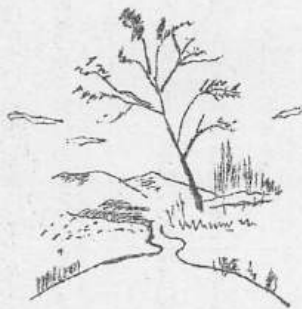
参加者並に競技成績左記の通り

優勝	小原祥男（新2）	106	1R
二位	岡田昌三（新5）	109	2R
三位	石井義章（学22）	104	G
		189	H
		215	N
		97	
		93	
		68	
		153	
		201	
		48	

四位	山本幸雄（学22）	117
五位	中井三郎（学22）	117
		234
		72
		162

尚今後出来れば春秋2回程度定例的に開催し契来總會或は月月の宴には全国より多数会員の御参集を得、麻雀大会、ゴルフコンペ或は散策にと盛大な会になればと夢見ておりますので、御意見御希望等どしどしお寄せ下さいませ様お待ちしております。

（石井 記）



# 凌泳会 総会

昭和39年 五月十五日(土)

定刻より約三十分遅れて開会

出席者 藤井正太郎先生 古林喜楽先生

鈴木啓介(学10) 岡本忠雄(学12)

岡田昌三(新5) 山口仁郎(新5) 宇賀史郎(新8)

酒井孝榮(新9) 野田 浩(新9) 浅間啓介(新10)

米田啓祐(新10) 丸山卓也(新10) 武政英幸(新12)

鈴木正弥(新12) 堤 莊祐(新12) 横田興二(新13)

現役 主将樋口周平 マネジャー 中畑勝明

真喜志好一 小越信昭

岡本忠男氏挨拶 遠路豊橋より御出席の

鈴木啓介氏から物故会員部坂克夫(学10) 山口八郎氏(学12)の

思い出等のお話しを聞き、議題に入った。

先づ昭和三十九年度凌泳会の会計報告があり特に凌泳会費徴収に

ついて検討された。

この機会にマネジャーを増員すること、凌泳会地区幹事の協力を

要請すること、水泳部の内外に対するPR、HRの必要なること

等の意見が出た。

次に四十年年度予算案については三十九年度の実績から凌泳会費徴収目標を増額して努力しようということになった。種々の事情から現役諸君の個人負担が増えてその為活動がにぶりがちの現況であるので是非会員の皆様の御理解と御協力を願って止まない次第であります。

次に主将樋口により本年度スケジュール及び、重点目標を市大戦、三商大戦に置く事よりも関西インカレ関西国公立に好成績を上げるよう考えている旨の力強い説明があった。

又藤井正太郎氏より市大定期戦の思い出、および要望がありジュース一本を前にしていつまでも話が尽きず五時過ぎ閉会した。

その後全員プールへ行き泳ぐ者、冷やかす者、感慨にふける者等、楽しい一刻を過して散会した。

昨年より多数の会員の方々が御多忙中を出席して頂けるようになり非常に有難く感謝しております。

岡田昌三(幹事)

昭和四十年度

凌泳會會員名簿